



現在のブラジル・サントス市街。移民の歴史はこの港町から始まった。移民の通訳で活躍した仁平高（秋田市出身）、移民を題材にした小説『蒼氓』で芥川賞を受賞した石川達三（横手市出身）など、秋田とブラジルは因縁浅からぬものがある

本年10月24日、ブラジル秋田県人会創立50周年を祝う式典が、サンパウロ市で盛大に行われた。

この会の会員は現在450名余り。在外の県人会としては最大規模になっている。そのほかアマゾンやブラジルにも地域県人会があり、合わせると500名余りがブラジルの秋田県人会に所属していることになる。例年キリタンポ会なども開かれているそうで、地球の真裏にありながら、ふるさと秋田を偲ぶ思いはひとしおなのであろう。

明治41年に始まった日本からのブラジル移民の中で秋田県出身者の総数は3800人ほどと推定され、その子孫まで含めると現在のブラジルにおいて秋田にゆかりのある人々は2万人以上に達するだろうといわれている。秋田県内25市町村に加えて、ブラジルにももう一つの秋田の町があるようなものだ。

私事になるが、先年筆者自身が取材でブラジルを訪れたとき、コーディネートや通訳で

現地在住の日本人ご夫婦にたいへんお世話になった。その方から久しぶりにメールがあり、「秋田県人会50周年の式典プログラムの制作を引き受けたのだけど、それに載せる秋田の写真をお貸してもらえないか」と言うのだ。もちろん、喜んで提供させていただくことにした。拙い写真ではあるが、ブラジル在住の秋田ゆかりの方たちに、その写真でふるさと秋田を懐かしんでいただけは私も本望である。

明治41年、第一回ブラジル移民船笠戸丸が神戸港を出港して、喜望峰回りでブラジル・サントス港に到達するまで実に52日を要した。現在であれば空路でほぼ一昼夜、日本からブラジルにデジタル写真を送るのであればインターネットを使って瞬時に行える。まさに隔世の感というものだ。

地球の裏側に、ふるさと秋田を懐かしがっている多くの人たちがいる。秋田に暮らす私たちも、彼らの思いを大事にしたいものである。

海の向こうの“秋田県”